

長崎と神戸の金門人コミュニティ

国立台湾師範大学東亜学系特聘教授 江 柏煒
(江仟慈訳、川島真監訳)

一、僑郷・金門：近代における海外移民

金門列島（主に金門島及び烈嶼）は閩南の九龍江口河口にあり、廈門の東に位置している。17世紀中葉から19世紀にかけて、金門人は東方の台湾へと渡り、金門は台湾における初期漢人移民の主要な出身地の一つとなった。例えば、澎湖諸島の住民のかなりの多くの人々は、17世紀中葉以降に金門から移住してきた人々だとされている。台南の安平、鹿港、艋舺（現在の萬華）などの地には「金門館」と呼ばれる施設が設けられたが、この金門館は移民の会館であると同時に信仰の中心としても機能していた。こうした金門と台湾との密接な関係から、多くの研究者は金門を「台湾住民の故郷の一つ」と見なしている。

19世紀から20世紀初頭にかけて、多くの金門出身の青年が生計を立てるために東南アジアへと渡航し、一部は日本の長崎や神戸にも移住した。金門は19世紀後半から1949年にかけて、四度にわたる大きな海外移民の波を経験した。第一の波は1860年代の大規模な南方移住である。第二の波は1912年から1929年に集中し、特に1915年以降、金門の人口は4割以上減少した（男性で43.35%、女性で39.06%の減少）。第三の波は1937年から1945年にかけての日本の中国侵略戦争期であり、第四の波は1945年から1949年の国共内戦によって引き起こされた。さらに、1954年の九三砲戦から1958年の八二三砲戦にかけては、一部の住民が戦火を避けて国外に避難し、こ

れが最後の移民の波となった¹。

『顕影』²などの僑刊（監訳者注記：華僑を輩出した母村と移民先との間を結びつけた村新聞・雑誌）を見れば、近代における金門出身の華僑の足跡が東南アジア各地に広がっていることがわかる。移民先は、シンガポール、マレー半島、北ボルネオ、インドネシア、フィリピン、ベトナム、タイ、ミャンマーなどの主要港湾都市に及んでいた。また、一部は日本や香港などにも移住していた。近代以降、金門は重要な僑郷とみなされ、海外の金門人コミュニティとの安定した交流関係が今なお続いている。

二、金門と長崎の間

日本は、金門人にとって重要な移住地の一つである。金門人は、まず長崎に渡り、その後、神戸や大阪へと移住先を拡大させていった。一部の家族は、日本を拠点として東アジアおよび東南アジア各地にまたがる貿易ネットワークを築き上げるとともに、故郷の金門に莫大な送金を行った。その送金が金門の近代化を後押しし、大きな貢献を果たしたのだった。

16世紀には長崎が西洋諸国にも開かれ、当初はポルトガル商人が来航し、その後はオランダ東インド会社（VOC）および華人による貿易活動が展開されるようになった。江戸時代、オランダは出島を拠点とし、華人は唐人屋敷を中心に活動していた。唐人屋敷は17世紀末に建設が開始さ

1 江柏煒「海外金門人の遷徙経験：以汶萊烈嶼家族為主的考察」『国史館館刊』第61期、2019年、117-174頁。

2 金門島の珠山の薛氏によって発行されたもので、当初は珠山小学校の校内刊行物であったが、その後、金門の僑郷である珠山と海外に移住した珠山出身の華僑たちとの間の情報通信を担う村新聞・雑誌へと発展した。1928年に創刊され、1937年に一旦休刊し、1946年に復刊後、1949年に終刊となった。合計第21巻・通算25号が発行された。詳細については、江柏煒「僑刊史料中的金門（1920s-40s）：珠山《顕影》（Shining）之考察」（『人文及社会科学集刊』第17巻第1期、中央研究院人文社会科学研究中心、2005年、159-216頁）を参照。

れ、華人の貿易活動を管理するために設けられた閉鎖型の居住区である。さらに、1702年には新たに人工島「新地」が造成され、倉庫および検疫施設として機能した。1859年の安政開港に伴い、唐船貿易の時代は終焉を迎えた。その後、1868年に唐人屋敷による集中管理機能も廃止された。現在でも、土神堂（1691年創建）、天后堂（1736年創建）、観音堂（1737年創建）、および福建会館（1868年創建、媽祖を祀る。図1参照）が保存されている。また、当時の絵師である石崎融思（1768-1846）の『唐館図絵巻』（1801-02年）、川原慶賀（1768-1860?）の『唐館絵巻』（1843年）、および作者不詳の『唐人屋敷図』といった絵画を通じて、当時の唐人屋敷内部における社会生活の様子をうかがい知ることが可能である。



図1 長崎福建会館（筆者撮影）

17世紀以降、長崎は海外華僑および華人にとって重要な居住地となった。商業活動が発展するにつれ、各地から訪れた華僑たちは宗教的な拠り所や死後の安息の場を求め、次々と寺院を建立していった。1602年に漳州出身の商人・欧陽華宇と張吉泉が浄土宗の悟真寺の隣接地に華僑の墓地を設けた。その後、1623年、三江（三江とは浙江、江蘇、江西を指す）幫が興福寺を、1628年、閩南出身者が福済寺を、1629年、福州幫が崇福寺をそれぞれ建立した。さらに、1677年には聖福寺が創建されたが、19世紀中葉、その付近には広東出身者が多く集住し、やがて「広東寺」と呼ばれるようになった。これらの仏教寺院は、宗教

的活動の場である一方で、華僑たちの社会生活の面倒を見る上でのさまざまな業務の面で重要な機能を担っていた。

当時、金門人は船員として清の寧波と長崎との間を往来し、活躍していた。その多くは、死亡すると長崎の福済寺の墓地に埋葬された。1945年の原爆投下により、福済寺とその墓地が損壊したため、戦後、寺院は墓碑を裏山に集約させた。現在でも339基が現存しており、そのうち84基には出身地が金門と記され、最も高い割合を占めている。また、調査の結果、この墓地には現存する中で確認可能な最古の海外在住金門人の墓碑が2基残されており、その建立は1745年に遡る。これにより、18世紀中葉以前から、すでに相当数の金門人が長崎に来訪、あるいは定住していたことが明らかとなっている（図2参照）。

開港以降の長崎には、より多くの華僑商人が訪れて、その影響力は徐々に高まりを見せた。1893年、清の駐長崎領事館の提唱の下に、閩南幫・三江幫・広東幫の三者が共同出資して孔子廟を建立した。さらに1905年には、駐長崎領事の卞緯昌が清朝政府および日本政府の許可を得て、孔子廟の敷地内に「時中小学校」を設立し、正式に開校した。



図2 長崎福済寺の墓碑（筆者撮影）

19世紀後半から20世紀初頭にかけて長崎における華商の中でも、金門の新頭村出身の陳国樑（1840-1908、字百興、号発興、瑞椿。図3参照）の一族の経営する「泰益号」が、相当な規模を誇

る商家であった。

新頭出身の陳国樑は、1866年、26歳の時に日本へ渡り、生計を立て始めた。彼は、叔父の陳達明が共同経営していた「泰昌号」の株を継承し（泰昌号は1861年創立、1892年に泰鋸号と改称、1901年に営業を終了）、さらに、1878年には泰昌号の号主に就任した。1892年、長崎福建会館の会長に就任し、当地の華僑コミュニティにおいて枢要な地位を得た。1901年、陳国樑は長男・陳世望（別名媽映、1869-1940）とともに泰益号を設立し、陳世望が号主を務めた。「泰益号」は日中間および南洋貿易を主軸に据え、その商業ネットワークは日本から、中国沿海、台湾、東南アジア各地に広がった。中でも台湾の商人は主要な取引パートナーであった。その商業活動は、華僑社会における伝統的な地縁・血縁関係を基礎とし、戦時下の不安定な情勢においても、台湾および東南アジアにおける閩南幫からの強力な支援を受けることで、貿易活動の継続できた。陳世望は父の志を受け継ぎ、「泰益号」を長崎屈指の商号へと発展させたほか、自ら1912年に長崎福建会館、1923年に長崎中華商会の会長ともなった。こうして陳国樑・陳世望父子二代は、日本と東アジア・東南アジアを結ぶ広域的な貿易ネットワークを構築し、長崎における華人社会に対しても大きな貢献を果たしたのである。

泰昌号（1860-1900）と泰益号（1901-1940）に遺された文書群は極めて豊富である。なかでも、約3,000冊におよぶ帳簿類には、日常の収支や貨物の流通、帳目の決算内容などが詳細に記録されている。約25,000通に及ぶ受領書簡も現存しており、日本、中国、台湾、東南アジアなどの各地の商号や取引先との往復通信が含まれている。これら膨大な史料に加えて、多くの未整理資料も残されており、近代における華僑貿易ネットワークの全体像を示す貴重かつ包括的な一次史料として高く評価されている。

これらの史料は泰益号の経営実態を具体的に明らかにするのみならず、近代華僑の越境的な貿易ネットワークやコミュニティ運営の仕組みも浮き

彫りにしており、非常に高い歴史的・学術的価値を備えている。現在、この史料群は陳国樑の曾孫である陳東華を通じて、中央研究院台湾史研究所檔案館に寄贈され、永久保存されると共に学術研究に供されている（https://archives.ith.sinica.edu.tw/news_con.php?no=329）。



図3 清の官服を着用した陳国樑（陳東華氏提供）

新頭の泰益号のほかに、長崎には金門人による商号が二つあった。一つは、山后下堡出身の梁有道（別名天就、生没年不詳）による和昌号、もう一つは英坑出身の黄聡明（別名金聡、生没年不詳）によるものである。金門の山后下堡出身の梁有道は1866年単身で来崎していた。これは、陳国樑の渡航とほぼ同時期にあたる。1885年には、新地八番地で和昌号を創設し、旅館業および海産物の貿易を営んだ。その後、事業は息子の梁肇三（1860-1912）に引き継がれた。梁肇三は商売で成功を収め、福建会館副総理を務めるに至った。1912年、梁肇三が逝去した際、その葬儀は閩南幫の福済寺にて執り行われた。当時の慣習に従い、遺体は棺に納められた後、船で金門へと送られ、現地で埋葬された。後任者は梁肇三の息子である梁順来（丕安）であった。彼は泰益号号主の陳世望の長女会治と結婚し、梁家と陳家は姻戚関係と

なった。梁順来と陳会治の息子である梁維芳は、1924年に、天津の南開学校（現：南開大学）へと「留学」した。1929年、世界恐慌をはじめとする複数の要因により和昌号は経営不振に陥り、日本における事業を終えることとなった。これを受けて、梁順来は妻の陳会治とともに金門へ帰郷した。その後、梁順来の息子の梁維芳は学業を終えて金門に戻り定住した。維芳の子・梁長明とその子孫は、現在に至るまで金門に居住している。

一方、黄聡明は1897年、新地七番地にて福興号を創設した。店舗は同郷の梁有道が経営する和昌号と隣接しており、両商号は並立しながら、当時の長崎における金門商号の代表的存在であった。福興号は、「福升棧」という旅館を営むとともに、中国東北部、朝鮮釜山とさらにはウラジオストクなどをその商業圏とし、海産物・陸産物の貿易を活発におこなった。福興号は、事業内容から見れば和昌号と競合関係にあり、釜山に支店「釜山浦塩福興号」を開設し、現地市場の開拓にも取り組んだ。事業が最盛期を迎えた時期、黄聡明は、金門英坑へ帰郷し、私邸である「奉直第」を建立した。その大門には、清朝駐長崎領事であった卞緯昌による題匾が掲げられ、対聯には「聡明仁兄大人属」と記されている。これは、1903年から1907年、すなわち福興号が最盛期を迎えていた時期の黄聡明の地位と名望を示すものであ



図4 福興号の黄聡明（後列左端）、和昌号の梁肇三（後列左から三人目）、泰益号の陳世望（後列左から四人目）（陳東華氏提供）



図5 1960年代の泰益号（陳東華氏提供）

る。また、泰益号文書によれば、福興号は泰益号にとっても重要な取引パートナーの一つであり、当時の長崎における金門人商号同士の緊密な経済的連携と協力関係がそこには示されている。（図4、5参照）

全体的に見ると、長崎における福建幫の中で金門出身者の人数は決して最多ではなかったが、19世紀末から20世紀初頭にかけての長崎の商業活動において金門出身者は際立った存在感を示していた。彼らは福建会館の運営をはじめ、華僑社会の結束や華人文化の継承に尽力し、その発展に大きく寄与した。さらに、長崎と金門とを頻繁に往来し、両地の近代化を推進する存在であった。

三、神戸と金門の間

横浜、長崎、函館の開港に続き、1868年には、関西の兵庫（神戸）が正式に開港し、大阪もこれに伴い開市された。同年8月7日、明治政府は「大阪兵庫外国人居留地約定書」を制定し、居留地における外国人による自治行政が認められた。自治機関として機能した居留地委員会は、各国の領事、兵庫県知事、および居留外国人の代表によって構成されていた。居留地の地代収入は居留地の運営基金となり、街路、下水道、街灯などの基礎インフラ整備に充てられた。また、道路補修や警備隊の経費は、毎年徴収される土地税や警察税によって賄われた。実際、神戸居留地の制度は上海のフランス租界章程や工部局の運営方法を参照したも

のであった。

開港後の神戸は、華僑を含む多くの外国人を惹きつけた。1869年英国領事が刊行した「コマーシャル・レポート (Commercial Report)」によれば、開港初期の神戸には500人以上の華僑が居住していたとされる。また、1870年兵庫県の調査では、「清国人の來寓する者300余人である」と記録され、同年の『ヒョーゴ・アンド・オオサカ・ヘラルド (The Hiogo and Osaka Herald)』では400人以上と報じられている。開港当初から華人が神戸へと移住し、その人口は年々増加の傾向を示していた。また、わずかな年を除き、神戸に居住する華僑の数は欧米系居住者を上回っていた。1887年以降には、神戸の華僑人口は華人の移住が最も早かった長崎を超え、横浜に次ぐ規模に達した³。

19世紀後半の神戸華人は、主に貿易商や欧米の洋行・銀行・海運会社の買弁、西服業、理髪業、中華料理業、印刷業、製靴業、塗装業、港の搬運工や計数工（船舶の積み降ろし時に貨物の数量を検査・確認する作業）、屠殺業、船員、居留地内の巡査、造船所の労働者、紅茶加工業、鍛冶職、飲食業、欧米人の雇員など、多岐にわたる職種で活動していた⁴。

貿易商は神戸における華僑社会の中心的な役割を担っていた。華商が輸出入業務に際して税関への申告および関税の納付を行うためには、神戸税関に商社登録を申請する必要があった。金門出身の王明玉（別名国珍、1843-1903。図6参照）が経営する復興号は、1885年に神戸税関に登録したが、同郷の黄礼蘭（英坑出身）が経営する広駿源号がその保証人となっていた。以下は、王明玉の申請書の内容である。

私義、今般神戸海岸通二丁目并大阪川口本田町二於テ復興字号ヲ開設致シ、上海諸港等之

貨物販売仕度、就而者右物貨出入報関納税等之義、貴下より神阪税関長江御照会之上准許ヲ蒙リ度、即別紙印章相添此段奉願上候也⁵。

1875年以降、日本ではマッチ（燐寸）工業が勃興し、1887年にはすでに主要な輸出産業となっていた。兵庫県と大阪府はマッチの主たる生産地であり、1889年から1893年にかけての全国マッチ生産量の65%から82%、生産額では77%から84%を占めており、その大部分は神戸港や大阪港から、中国、東南アジア、インドなどを中心とする諸市場へ輸出されていた。1889年のイギリス領事による「コマーシャル・レポート」では、日本製の廉価なマッチが中国およびイギリス植民地などで販売され、その価格は欧州製品よりも大きく安価であったと指摘されている。さらに、1895年の同報告では、マッチは神戸において米に次ぐ主要輸出品となり、低価格であることが競争上の優位性となっていると述べられている。神戸在住の華僑たちは、中国および東南アジアに広がる商業ネットワークを活用し、マッチ貿易に積極的に関わり、大きな利益を得た⁶。金門出身の王明玉が創立した復興号も、マッチの輸出を事業の柱とし、大阪の支店を通じて中国および東南アジア市場と結びつき、当時の神戸華僑によるマッチ貿易の中核的な担い手の一つとなっていた。

この復興号の隆盛は、神戸における金門人商号の重要な成果の一つであった。1868年頃、金門山后出身の王明玉は、25歳前後の時に日本へ渡航した。布袋劇団を率いて唐船に乗り、長崎の「碇」と呼ばれる地域に初上陸した。1871年には、大阪の川口田町および神戸の海岸通二丁目に、対中貿易を主とする貿易商号「復興号」を創設した。1892年には神戸中央区海岸通三丁目一番地22号に移転し、以降はここを拠点として事業を着々と拡大していった。⁷

3 中華会館編『落地生根：神戸華僑と神阪中華会館の百年』研文出版、2000年、26-54頁。

4 同上書、58頁。

5 同上書、58頁。

6 同上書、78-86頁。

7 江柏煒「晚清時期的華僑家族及僑資聚落：福建金門山后王氏中堡之案例研究」『人文及社会科学集刊』第15卷第1期、中央研究院中山人文社会科学所、2003年、1-57頁。

華商は通常、方言に基づく「幫」を基盤として経営を行っていたが、復興号はそれとは異なり、貿易相手や取扱品目においても一般的な福建系商社よりも広がりをもっていた。貿易相手は他の方言集団にも及び、取扱品目も多様化していった。1910年の調査によれば、復興号は、マッチ、海産物および雑貨を中国各地へと輸出し、日本からは米や豆などの農産物を中国などに輸出しており、従来の華商の経営枠組みとは一線を画す方法で事業を展開していた。一方、王家の第二世代は日本社会への積極的な融合を図り、王敬祥は1902年に、王敬済は1903年にそれぞれ日本に帰化した。他方、王親子は地域社会の公共事務や華僑団体の運営においても活躍していた。1870年には、王明玉が福建系商人による「八閩公所」（後の福建会館）の設立を主導し、復興号の建物内にその会館を設けた。王敬祥は父の志を継ぎ、長年にわたり同公所の会長を務め、父子二代で52年間のその地位にあり、王家は神戸華僑社会における指導的地位を確立していった。さらに、王敬斗は1925年に中華会館理事長、1927年には神阪華僑教育統一協会副委員長に就任するなど、一族の



図6 王明玉（王柏林氏提供）



図7 1926年に撮影された神戸福建公所（福建会館の前身）の理事の集合写真（林正茂氏提供）

活動はより広範囲の華僑コミュニティへと展開し、その商業的・社会的地位も着実に高まっていった。（図7参照）

1920-30年代には、日本に移住していた山後の王家が、すでに広大な東アジアの貿易ネットワークを構築していた。神戸を事業拠点とし、中国沿岸の天津、大連、營口、ハルビンに支店を開き、さらに南洋各港にも関連会社を持っていた。このネットワークには、神戸の復興公司、振興号、源興号、致和号のほか、廈門の敬記洋行および昌記号、上海の復興隆、シンガポールの和記公司、安南（現在のベトナム）・ダナムの東南公司、インドネシア・スラバヤの和興号などが含まれ、貿易ネットワークは各地へと展開していた。

王明玉は、王敬祥を復興号の後継者と定めた。王敬祥（字敬瑞、1871-1922）は、幼い頃に故郷である金門の私塾に通い、中国の伝統的教育を受けた⁸。1885年、15歳で日本に赴き、最初は大阪西区川口本田町の復興号に居住し、日本語を学びつつ貿易業務を身につけていった。1892年9月には神戸市海岸通三丁目に移転した復興号に移り住み、1899年、家業を継いで復興号の事業をさらに伸張させた。1913年からは横浜正金銀行神戸支店のコンプラドール（買弁）を務め、日本の有力な政治家、実業家、文化人との幅広い交流を築いていった。また、王敬祥は孫文を支持し、

8 王柏林「關於『王敬祥関係文書』」第四屆孫中山与現代中国學術研討會、国父紀念館主催、1991年、2頁。



図8 王敬祥・陳善娘夫妻（前列着席）とその家族、およそ1920年

中国国民党神戸支部長にも就任し、中国の近代化に向けて多大な貢献を果たした（図8参照）。王敬祥の長孫である王柏林（1929-2022、図9参照）は王敬祥について次のように述べている。

王敬祥は、地元神戸の方々とも親しくお付き合いを頂いていました。滝川儀作氏、松方幸次郎氏、小寺謙吉氏らとも親交があり、父の話では、松方さんはよく馬車に乗って来られていたと聞いています。

岡崎家が同和火災海上の前身であります地元企業の神戸海上火災保険株式会社を設立された時には、王敬祥も、神戸の財界人らと共に



図9 王敬祥の孫である王柏林（左）と王柏群（右）、2012年（筆者撮影）

に株式の引受けを行なったという資料を、先日同社の関係者から提供していただきました。

（中略）王敬祥は、神戸の中華会館が社団法人として組織される際、呉錦堂⁹や麦少彭¹⁰らと三人で、一人二万円宛を基金として拠出し、中華商務総会の会頭を務め、同文学校には十五年間も副理事長を務めるなど、神戸の華僑のためにも相応の貢献を致しております¹¹。

神戸の王家は、金門に「山后中堡村」という貴重な文化財を遺した。王明玉は商売に成功し、1876年から1900年にかけて金門に帰郷し、一族の定住のために一つの村を建設した。この計画的に整備された村落は、着工から完成までに25年を要し、計16棟の大邸宅のほか、王氏の家廟と海珠堂（図10参照）をそれぞれ1棟ずつ備えている。冷戦期において金門は戦地の最前線と位置づけられたが、軍当局は経費を投じて山后中堡を民俗文化村として復元すべく工事を行った。1992年に戦地政務が解除され、1995年に金門国家公園が設立されて以降、山后中堡は同公園の管理下に置かれている。現在では金門を代表する観



図10 かつて金門山后中堡で私塾として使われていた海珠堂（筆者撮影）

9 呉錦堂（1855-1926）は浙江省慈溪出身の商人。若い頃に日本に渡り、商売を通じて財を成し、孫文の革命事業を支援した。彼の別荘「松海山荘」は後に「移情閣」と改称され、1966年に神戸華僑総会に、1982年には兵庫県に寄贈された。1984年に改修の上、「孫文記念館」として一般公開され、1993年には兵庫県の有形文化財に指定された。

10 麦少彭（1861-1910）は広東省南海県出身の商人。20歳の時、父麦梅生に伴われて大阪に渡り、その後神戸に移住。12番地にて怡和号を創設し、有力な実業家となった。

11 王柏林前掲「關於『王敬祥関係文書』」第四屆孫中山与現代中国學術研討会、2頁。

光地の一つとなっており、来訪者は屋内外の展示解説を通して、神戸と金門の歴史と文化的なつながりについて理解を深めることができる。

結論－移民の記憶と現代への継承－

現在、多くの人々が金門を冷戦期における戦略的要衝だと認識している。とりわけ1950年代の白団など日本の軍事顧問が金門の防衛体制に与えた影響などに、日本では注目が集まっているのかもしれない。しかし、歴史を振り返れば、金門はすでに17世紀以来、東アジア・東南アジアにおける華僑の主要な僑郷として存在し、金門人は長年にわたり国際的な貿易・航運ネットワークの中で重要な役割を果たしてきた。そして、長崎の唐船貿易における船員集団としても、また1868年の福建会館の設立、泰益号などの主要商号の経営、そして神戸の復興号と王家の革命運動などへの

貢献など、さまざまな面で金門人は日本の華僑社会において常に中核的な地位を占めていた。彼らは、越境的な貿易活動、宗教的信仰、地域コミュニティの運営を通じて、地域に根差した紐帯を基礎に文化的アイデンティティを築き上げ、その僑郷ネットワークは現在も継承されている。

現在、こうしたことを示す歴史的記憶は長崎の唐人屋敷や福済寺墓地、神戸華僑歴史博物館、移情閣などに残されているほか、金門の新頭、英坑、山后下堡および山后中堡といった文化空間におけるナラティブを伴う展示、保存された文化遺産、また観光資源となることなどを通じ、金門と長崎・神戸との歴史的結びつきを再認識する上で貴重な架け橋となっていると言えるだろう。このような文化的継承は今後も重視されるべき課題であり、さらなる深化と社会への影響の強化が期待される。